

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	北村 直彰
主 論 文 題 名： The Layers and Limits of Reality: A Metaphysics of Grounding and Fundamentality (実在の階層と限界——基礎づけと基礎性の形而上学)				
(内容の要旨) 本論文は、世界が全体として備える階層的な構造を「基礎づけ (grounding)」と呼ばれる非因果的・構成的な決定関係によって特徴づけようとする形而上学的プログラムにまつわる基本的な問題を扱う。 世界の構造に関する直観的な見方のひとつは、〈さまざまな種類の事実のあいだに階層的な関係がある〉というものである。たとえば、我々の信念や知覚に関する心理学的事実は脳状態をはじめとする生物学的事実に依存しており、それらの生物学的事実は生体組織を構成する水やタンパク質などについての化学的事実によって支えられ、さらに、それらの化学的事実は最終的には素粒子についての物理学的事実に基づいている。ここで「支えられる」「基づく」といった語句で表されている関係は、上層に位置する種類の事実が下層に位置する種類の事実によって決定される、ということを含意するものである。たとえば、どんな生物学的事実が成り立つかが決まれば、どんな心理学的事実が成り立つかも決まる、というように。そして、あらゆる事実を決定する最下層の事実を構成するのは、この世界を形づくる基本的な要素となる存在者である。たとえば電子やクォークはそうした構成要素のひとつであり、水や人体や痛みはそれらに依存する派生的な存在者である、と考えられる。じっさいにどのような種類の事実がどのような階層を成しているか、この世界の基本的な構成要素はどのような存在者か、といったことはもちろん大きな問題であるが、実在が全体としてある種の階層構造を備えているという考えそのものは、探究の分野を問わず広く共有されているだろう。 本論文がとりあげるのは、世界の構造についてのこのような直観的な描像を「形而上学的基礎づけ」という概念によって特徴づけようとするプログラムである。このプログラムの大きな特徴は、どのような関係によって階層構造を捉えるのかという点に関して穏健でもありかつ野心的でもある、ということである。すなわち、上下の階層を同一性関係で結ぶことによって最下層の事実へとすべてを還元するような捉え方を拒否するという点では穏健である一方で、様相的な関係 (スーパーヴィーニエンス関係) よりも強い形而上学的な説明関係によって階層構造を特徴づけようとするという点で野心的なプ				

プログラムであるといえる。基礎づけ関係についての主張の例は、さまざまな哲学の分野において見いだすことができる。たとえば、「ある心的な事実が成り立つのは、なんらかの神経生理学的な事実成り立つからである」「規範的な事実は自然的な事実によって支えられている」「対象がある傾向性をもつことは、その基盤となるカテゴリーカルな性質をもつことによる」「複合的对象の存在はその部分の存在と配列によって説明される」「任意の空でない集合は、その要素から構成されるものであり、そうした要素に対して派生的なものである」といった主張が挙げられる。これらの例からわかるように、基礎づけ関係についての主張はしばしば、「…だからである (because)」や「…によって (in virtue of)」といった、説明に関連する語彙で表現される。これらの例のいずれにおいても、説明項となる事実（ある事実を基礎づける事実）は、被説明項となる事実（ある事実によって基礎づけられる事実）に対して形而上学的な優位性をもっていると捉えられている。本論文がとりあげるプログラムは、こうした説明的な形而上学的優位性関係によってさまざまな種類の事実を結びつけるというしかたで世界の階層構造を捉える試みにほかならない。

このようなプログラムを主要な動機として、基礎づけ関係の本性と理論的有用性をめぐる探究が分析形而上学の分野において盛んになされてきた。しかし、基礎づけに関する一般的な理論とその応用いずれの側面においても、見込みのあるといえるような解決策がいまだほとんど提案されていない問題群が残りつづけている。本論文はそうした問題のなかでもとくに基本的であると考えられるものに体系的なしかたで取り組み、有望な解決策を提出すること、またそれを通じて、世界の階層構造の特徴づけに関する上述のプログラムの追究に対して基礎的な貢献をなすことを目指したものである。

本論文の前半部では、基礎づけの一般理論の整合性について、ふたつの観点から考察する。すなわち、基礎づけの理論の内的整合性、および、基礎づけの理論と部分全体関係の理論（メレオロジー）とのあいだの整合性である。これらの考察において、二種類の整合性をそれぞれ擁護するとともに、それを通じて、基礎づけ関係がもついくつかの重要な性質を明らかにする。本論文の後半部では、前半部において整合性が示された基礎づけの理論を、世界の基礎的な特徴に関する個別の形而上学的問題に対して応用し、その解決を図る。とくに、「否定的な真理はどのようなしかたで実在に依拠しているのか」という問題を論じる。具体的には、まず、真理と実在との関係に関する理論として「truthmaker 理論」と呼ばれるものを取りあげ、その意義と有用性を擁護する。そのうえで、あらゆる否定的真理の truthmaker は世界全体である——否定的真理は世界の存在という基礎的な事実によって存在論的に基礎づけられている——と主張する。

第一章 ("Introduction: Motivation and Aim") では、本論文が取り組む課題を設定するとともに、本論文がその全体を通じて依拠する前提を明示する。

第二章 ("A Neo-Aristotelian Conception of Metaphysics and Its Contenders") では、第一章で設定された課題に取り組むための予備的な考察をおこなう。具体的には、基礎づけ関係に基づくアイデアを中核とするメタ形而上学的立場である新アリストテレス主義の主眼と意義を説明したうえで、それと対立するふたつの立場——クワイン主義と新マイノング主義——からの反論をとりあげ、新アリストテレス主義をそれらの反論から擁護する。まず、「クワイン的な存在の問いはトリヴィアルである」という新アリストテレス主義の主張を確認し、この主張に対するクワイン主義からの反論を斥ける。そのさいに主な焦点となるのは、基礎づけについての問いと存在についての問いをどのように分離しうるか、という論点である。つぎに、量化と基礎性の関係に対する新アリストテレス主義的な捉え方と、量化と存在の関係に関する新マイノング主義的な捉え方が類比的な関係にあることを確認したうえで、「基礎性は（性質としての）存在と同一視されるべきである」という主張を検討し、それを斥ける。そのさいには、新マイノング主義的な存在概念がその理解可能性に関して抱える困難が明確化される。これらの反駁の作業によって、基礎づけの理論を探究することの重要性がメタ形而上学的観点から明らかにされ、探究へのさらなる動機があたえられる。

第三章 ("Resolving the Paradox of Grounding") では、基礎づけの理論の内的整合性の問題を論じる。とくに、キット・ファインの論文 "Some Puzzles of Ground" (2010) によって提示された基礎づけ関係にまつわるパラドクスについて考察し、解決策を提案する。ファインは、基礎づけ関係の論理的法則として広く受けいれられている法則が、基礎づけに関するいくつかのもっともらしい原理と不整合をきたすことを指摘した。このパラドクスがどのように解決されうるかを論じるために、本論文は、ファインの論文において十分に検討されていないと思われるいくつかの原理に焦点をあてて考察をおこなう。本論文が提案する解決策の基盤となるのは、それらの原理に対するデフレ的形而上学的解釈である。すなわち、ある種の事実含意的な構文によって述べられる原理——それらは、ファイン的なパラドクスの論証において不可欠な前提をなす——は、たんなる概念的な説明を表現するにすぎず、形而上学的な実質をもたない、と論じる。それをもとに、ファイン的なパラドクスが生じるのは、基礎づけと呼ばれる同じひとつの関係にふたつの異なる種類の非因果的説明が対応させられてしまったためである、と主張する。この議論によって、基礎づけ関係の論理的性質のひとつとして考えられている非対称性は非因果的説明的関係一般に成り立つものではない、ということが明らかになる。

第四章では、基礎づけ関係の理論と部分全体関係の理論（メレオロジー）との整合性の問題を論じる。とくに、ジョナサン・タラントの論文"Problems of Parthood for Proponents of Priority" (2013) によって提示された、世界のメレオロジカルな構造に関するある種の可能性が「ある種の対象は基礎的であり、他の対象はそれらに依存する」というテーゼ（PV）と不整合をきたすという主張を検討し、それに対する反論をおこなう。タラントの論証では、あらゆる対象がなんらかの真部分をもつ世界（ガंकな世界）において、基礎的な対象はふたつ以上であるという仮定（多元論）が偽になり、あらゆる対象がなんらかの別の対象の真部分である世界（ジャンクな世界）において、基礎的な対象はひとつであるという仮定（一元論）が偽になると主張される。この論証に対して本論文は、そうした可能性の想定は PV それ自体と衝突することはない、と主張する。まず、多元論それ自体は非原子論的前提と整合的であることを示すことによって、ガंकな世界において多元論が偽になるという主張を斥ける。さらに、ジャンクな世界の可能性の想定において存在概念が二種類の解釈を許容することを指摘することによって、ジャンクな世界の可能性に基づく論証がジレンマに陥ることを示す。すなわち、一方の解釈では問題の論証が論点先取の虚偽を犯すことになり、他方の解釈では、存在するものの領域に新アリストテレス主義的観点からは許容不可能な制限が課される、ということを示す。

第五章では、「真にするもの truthmaker」の理論に対するふたつの一般的反論を批判的に検討する。それを通じて擁護される truthmaker 理論は、否定的真理を存在論的に基礎づけるものに関する本論文の主張（第六章）が依拠する理論的道具立てとなる。まず第五章の前半部において、truthmaker 概念の有用性に対する反論を検討し、それを斥ける。truthmaker 理論は、世界の基礎的な特徴に真理がどのように存在論的に基礎づけられているかに関する理論として捉えなおされてはじめてその意義が十分に理解される、ということが示される。第五章の後半部では、「truthmaker 理論は全面主義という見込みのない立場にコミットせざるをえないため拒否すべきである」という反論を検討し、それを斥ける。そこで焦点となるのは、truthmaker 理論は全面主義（すべての真理が truthmaker をもつという立場）を採らなければならない、という主張である。問題の反論は、真理と実在とのあいだの依存関係を理論的に定式化したものが truthmaker 原理であるということを前提することによってこの主張を根拠づけているが、truthmaking 関係と基礎づけ関係とを適切に関連づけることにより、その前提が偽であることが示される。またそれによって、否定的真理の実在論的基盤の問題が truthmaker 理論にとって重要であるのは、否定的真理を存在に関する真理によって説明することでそれらを世界の基礎的な特徴から除外する儉約的な理論が得られることによる、ということも明らかになる。

第六章 ("The Groundedness of Negative Truths") では、第五章において擁護された truthmaker 理論に基づいて、否定的真理の truthmaker を特定するという課題に取り組む。まず第六章の前半部において、否定的真理の truthmaker を特定しようとするいくつかの既存の試みに焦点をあて、それらに対して提示された一般的反論を検討する。その反論は、否定的真理の truthmaker として提案された対象について、それが存在するための必要条件に当る否定的真理の成立が含まれていること、そしてそれゆえに、その truthmaker の措定による説明が循環に陥っているということを示そうとするものである。この反論に対して本論文は、問題の「必要条件」が両義的であることを指摘し、それに基づいて、反論者がジレンマに陥ることを示す。すなわち、問題の「必要条件」が概念的なものであると考えるならば、この反論は truthmaking に関する主張にとって効力をもたなくなるが、その一方で、問題の「必要条件」が形而上学的なものであると考えるならば、反論者は論点先取の虚偽を犯すことになる、ということを示す。この議論によって、否定的真理の truthmaker を特定しようとする試みの成否を論じるため必要となる手続きが明確化される。つぎに、第六章の後半部において、あらゆる否定的真理の truthmaker は世界全体である——否定的真理は世界の存在という基礎的な事実によって存在論的に基礎づけられている——という主張を提示し、それを擁護する。この主張は、「現実世界」と呼ばれる存在者に訴えることによってすべての否定的真理に truthmaker をあたえようとするロス・キャメロンの戦略を、第五章において捉えなおされた truthmaker 理論のもとで洗練・強化したものである。具体的には、キャメロンの戦略が抱えるふたつの困難を指摘するとともに、それらの困難を回避するための方策を提案する。第一に、キャメロンの戦略が「現実世界」の本質的な極大性と存在論的依存性に関して不整合に陥っているようにみえることを確認したうえで、「完全な基礎づけ」と「部分的な基礎づけ」とを区別することによってその不整合が回避できるということを示す。第二に、全体としての世界がどのような事物様相をもっているかに関してキャメロンの戦略が受けいれがたい帰結をもつことを確認したうえで、「世界全体」という語が指示しうるものとしてふたつの対象を区別する——異なる事物様相的性質をもつふたつの極大的対象が物質的一致の関係にあると考える——ことによってその帰結が回避できるということを示す。

第七章 ("Conclusion") では、各章でなされた議論についてそれぞれの要点を整理したうえで、本論文全体を動機づけるプログラムの観点から一般的帰結を導き出す。とくに、本論文での議論によって得られた主要な諸成果、および、それらにいたる過程で明確化された種々の論点が、世界の基礎づけの階層構造をめぐる他のさまざまな問題の探究において依拠されるべき土台を形成するものであることを確認する。

